台湾女流作家三毛(サンマオ)研究
——そのモダニズムの影響を受けた背景について——

李　丹丹

はじめに

台湾の女流作家三毛(筆名)は、本名を陳平といい、1945年[1]3月に四川省重慶市で生まれた。父親の陳嗣慶は弁護士を勤め、母親の繆進蘭は専業主婦であった。戦争時代[2]に生まれたため、陳嗣慶は平和を祈る気持ちを込め、三毛に「平」と名づけた[3]。1948年一家で台湾に移住した[4]。三毛は幼少の頃から広くさまざまな書物を読んだ。中学校二年の時、教師にカンニングしたのではないかと疑われ、インクのついた筆で目の周りに丸を描かれキャンパスを一周させられた。この「カンニング事件」のショックで三毛は登校を拒否するようになった。やがて自閉状態に陥ったため、休学せざるを得なかった。家に閉じこもる日々が7年間続いた。その間、父親が先生のかわりになり、英語、唐詩などを教えた。1960年か1961年、自分のアトリエで絵画教室を開いていた顧福生のもとで洋画を学び始めた。1962年、小説の処女作「惑(まどい)」を発表した。1964年、聴講生として台北の中国文化大学に入学し、1967年に休学してスペインに留学した。その後、引き続きドイツ、アメリカに留学し、1970年に台湾に戻った。1973年再び台湾を離れ、当時スペイン領だったサハラ砂漠に赴く。1974年、サハラ砂漠内の法院でスペイン人荷西(ホセ)と結婚。砂漠での生活は彼女に創作の才能の花を開かせた。同年随筆「砂漠の中のレストラン」(「沙漠中的飯店」)を発表、これを契機に三毛は次々と作品を執筆した。1979年に夫荷西が突然事故死する。1981年、再び台湾に戻り、創作活動を続ける一方、中国文化大学の中文科で教鞭をとった。1991年、三毛は自ら世を去り、数奇な生涯を終えた。

三毛の初期作品[5]の一部(最初の4篇[6])にモダニズムの影響が見られる。本論では60年代に三毛がモダニズムの影響を受けた背景について考察したい。(作品に見られるモダニズムの影響については別の機会に検討する。)

1．20世紀60年代前後の台湾におけるモダニズム文学

1960年代にモダニズムが台湾文壇で流行した。モダニズム文学が台湾で盛ん

になった背景について、一般的な見方を簡単に紹介しておく。

まず政治的背景から。1950、60 年代、台湾は国民党の独裁政治体制下にあった。独裁政治下で、作家たちは自由に創作ができなかった。そのことに対して不満を持った知識階層は政治に次第に無関心になり、特定社会の一部分として人間を考えず、普遍的人類の一部分として人間を考えるようになる。白先勇は次のように言う。「與‘五四’時代的作家完全相反，這些作家為了避過政府的檢查，處處避免正面評議當前社會政治問題，轉向個人內心的探索。[7]」(「‘五四’時代の作家とは全く違って、これらの作家は政府の検閲を避けるために、社会政治問題に対して正直な評論はできるだけ語らず、個人の内心への探求へと転向する。」)と。

社会的背景からすれば、1960 年代は台湾の高度経済成長期にあたる。西洋への市場の開放とともに西洋文化も押し寄せた。その当時成人期を迎えた台湾の戦後世代はその親の世代と違い、戦争や植民地などの歴史に対しておぼろげな記憶しか持っていない。そのため、彼らは西洋文化を受け入れやすかった。彼らの文学も過去の歴史に対する記憶より、西洋モダニズム思想の影響で現実の台湾社会に於ける人間性の問題の方を大きく取り上げた。

こうした背景の下で、非理性と自己表現を主張するモダニズムは知識階層に広く受け入れられるようになる。1956 年、紀弦[8]は「現代派」(「モダニズム派」を中国語でこういう)が成立したことを宣言する。同年、夏済安[9]は『文学雑誌』を創刊する。この雑誌は文学の自由精神を強調し、作家に対して西洋の文学理論を参考にする必要性などについて論じた。そして、1960 年、台湾大学外国語学科の学生が『現代文学』を創刊する。その後、『現代文学』がモダニズムの拠点となる。編集長は白先勇(後出)で、主要編集者は陳若曦(後出)、欧陽子[10]、王文興[11]などである。同誌は編集者たちの作品を発表する以外、20 世紀の西洋のモダニズム文学の作家と作品の紹介に全力を傾けた。同誌によって紹介された作家はカフカ(Franz Kafka)、ジョイス(James.Joyce)、サルトル(Sartre)、カミュ(Albert Camus)、フォークナー(William Faulkner)などである。

60 年代台湾におけるモダニズムブームの中、最も盛んであったのは実存主義(モダニズムの一派)である。台湾の文藝理論家何欣は当時の状況をこう語る。

「那時[60 年代——筆者]存在主義像一陣狂風，其力似乎不可抗的。存在主義哲學方面的著作有了譯本，獲得了廣大讀者的喜愛，薩特和卡繆的作品之分析介紹，出現在雜誌上和報紙副刊上，沒讀≪嘔吐≫、≪異鄉人≫，甚至卡夫卡的小說的文學的文學愛好者，彷彿就像沒有讀過好書似的。為什麼台灣的讀者會那麼熱烈地接受存在主義哲學，多少有些令人不解，但這個哲學思想確曾迷醉了年輕一代。[12]」

(「当時 [60 年代——筆者]、実存主義はひとしきりの狂風に似て、その力はとても拒否できそうなものではなかった。実存主義哲学の著作は訳本が出て、多数の読者に好まれた。サルトルとカミュの作品に関する分析や紹介な

どが、雑誌と新聞の文芸欄に現れた。『嘔吐』、『異邦人』はもちろんだが、カフカの小説を読んだことのない文藝愛好者ですら、まるで良い本を読んだことのない人のように見えた。どうして台湾の読者があれほど心から実存主義哲学を受け入れようとしたのか、多少分からない点があるが、この哲学思想は間違いなく青年世代を陶酔させたのだ。」)

台湾においてモダニズム思潮は、50年代の後半に発生し、70年代の前半まで、ほぼ20年に亘って台湾文壇で強い影響力を持った。60年代の前半はそのピークである。

2．1960年前後の三毛

1957年、三毛が12歳の時、彼女は精神的に大きな打撃を受けた。中学2年生の三毛は数学のテストで担当の教師にカンニングをしたのではないかと疑われ、インクをたっぷり含んだ筆で両眼に丸を描かれた。教師はさらに三毛にキャンパスを一回りさせた。それを見て皆は笑った。三毛はこの「カンニング事件」に大きなショックを受け、その後登校を拒否するようになった。そればかりか三毛はやがて自閉状態になり、休学せざるを得なかった。張瑞德と陳愛璞はこの時期の三毛について次のように述べている。

「她[三毛——筆者]日甚一日地把自己封閉起來，不只是足不出戶的空間封閉，更有心靈的自我封閉——中斷了與任何人的心靈溝通。[13]」

(「彼女［三毛——筆者］は日々に自分を閉じ込めていった。それは単に足を家から出さないという空間的な閉じ込めだけでなく、心の閉じ込め——すべての人との心の交流を絶つこと——もあった。」)

三毛本人はエッセーの中でその時の自分を次のように述べている。

「我的天地，只是那幢日式房子、父親母親、放學歸來時的姊弟，而這些人我是絕對不主動去接觸的。

向街的大門，是沒有意義的，對我，街上沒有可走的路。

小小的我，唯一的活動，便是在無人的午後繞著小院的水泥地一圈一圈的溜冰。[14]」

(「私の世界は、あの日本式の建物、両親、放課後になって帰ってきた姉と弟だけだった。しかしこの人たちに私から積極的に接することは決してなかった。

通りに面した門は意味がない、私にとっては。町には私が歩ける道がないから。

幼い私の唯一の活動は、誰もいない午後に、小さな庭のコンクリートの地

面をスケートで滑って回ることだった。」)

このように心を閉じて家に閉じこもる日々は 7 年続く。この間、台湾文壇ではモダニズム文学が盛んに流行していた。当時心を病んでいた三毛は、非理性を主張するモダニズムを受け入れやすい状況にあったと考えられる。

なお 1964 年、病気がほぼ快癒した三毛は、中国文化大学の創立者张其昀の許可を得て、聴講生として該大学へ入学した。

3．三毛が尊敬し恋愛感情を抱いていた人がモダニストであった

（1）顧福生とその 1960 年前後の芸術主張及び創作

三毛は 1960 年か 1961 年初めから 1961 年末まで、姉の知り合いの紹介で顧福生のもとで油絵を習う。顧福生の画室は当時自閉状態にあった三毛が週 2 回唯一出かけたところである[15]。彼は当時の三毛に重大な影響を与えた人物だと考えられる。

まず顧福生がどのような人物であるかを見てみよう。

顧福生、1935 年に上海で生まれ、13 歳の時(1948 年)、一家で台湾に移住する。父親は国民党の顧祝同将軍である。1954 年、台湾師範大学美術学科に入学し、1957 年韓湘寧、劉国松などと「五月画会」を創立する。1961 年末にパリへ渡る。1963 年にニューヨークへ移り、それ以来アメリカに定住。

次に台湾時代の顧福生の芸術主張と創作を見てみよう。

台湾時代の顧福生が属していた「五月画会」とは、伝統を破るモダニズム美術を唱え導く団体である。顧福生は創立者の一員として台湾のモダニズム美術に熱心に取り組んでいた。また、顧福生は当時台湾文壇のモダニズム文学の主要メンバーとして活躍していた白先勇や陳若曦などと友人同士であった。1960 年前後、これら若手のモダニズムに傾倒していた芸術家たちは互いに励まし合っていた。この点について頼瑛瑛は次のように述べる。

「因為世家交游及興趣相投，顧福生年少時期即與白先勇、陳若曦等人熟稔，現代主義及存在主義哲學更是其生命的共識。顧福生因專擅繪畫，故亦踴躍提供畫作以為≪現代文學≫内文的插圖，白先勇的著名小說≪孽子≫亦以其畫作為封面。[16]」

(「父親の代からの交際があり趣味も同じであったので、顧福生は早く少年時代から白先勇、陳若曦などと馴染んでいた。モダニズムと実存主義哲学は特に彼らの“生命”の共通認識であった。顧福生は絵画が上手なため、積極的に『現代文学』に挿絵用の絵を提供した。白先勇の有名な小説『孽子』[『鬼っこ』――筆者]の表紙の絵も顧福生の作品である。」)

顧福生個人の芸術主張というと、無論モダニズムから切り離して論ずることはできない。頼瑛瑛によると実存主義は顧福生の生涯の中心思想である[17]。顧福生は生涯、人体を表現する作品の創作に取り組み続けた。彼がフランスに渡る前に描いた作品の特徴を見ておこう。

「呼應著存在主義的苦悶荒蕪的精神情境，又在權威社會及家庭的環境制約下，顧福生生命的『存在困境』似乎特別沉重，無以遁形的現世枷鎖，轉化為劇烈掙扎人體。［略――筆者］作品共通的特色是抽離時間及空間下瘦長孤寂的人。這些人沒有個別的特徵，人體造型或是拉長變形，或是右手搭心的防衛性姿態。[18]」

（「苦悶に陥っている荒涼とした実存主義的精神状況の影響を受け、さらに権威社会と家庭環境の制約の元で、顧福生の“生命”の“存在苦境”は特別にひどかったようである。逃れようのない現世の束縛と圧迫は、激しくあがく人体に変わる。［略――筆者］顧福生の作品の共通の特徴は、時間と空間を超越した世界にのっぽで孤独な人が描かれていることである。これらの人たちには個別の特徴がなく、人体の形は変形されて長くなっているか、右手を心臓に当てて身を守っている姿である。」）

この時期の顧福生の絵はほとんど時間と空間の背景をぼかして、つまり特定な社会環境を隠して、激しくあがいている人体を表現している。白先勇は、顧福生が人体の表現を通じて現世の人間の心の世界を探ろうとする作品を描いたこの時期を「青色時期」と呼んだ。

「顧福生創造了一系列半抽象人體畫。在那作畫的小天地中，陳列滿了一幅幅青蒼色調，各種變形的人體。那麼多人，總和起來卻是一個孤獨。那是顧福生的『青色時期』[19]」

（「顧福生は一連の半抽象の人体画を創作した。あの絵を描くための小部屋に、青い色調の、いろいろな変形した人体の絵が何枚も陳列されていた。数多くの人が描かれているが、作者が表わそうとしたテーマは総合して言うと孤独ということである。それは顧福生の『青色時期』である。」）

ひょっとして顧福生はピカソの「青の時代」（中国語で「藍色時期」あるいは「藍色時代」という）の絵の影響を受けたかも知れない。

（2）顧福生に対する三毛の思い

（1）で述べたように60年代前後の顧福生は芸術界に於いてモダニズムを提唱する一員であった。当時三毛は絵の先生として顧福生を心から尊敬し、感謝していた。それは三毛の後のエッセー「顧みて」[20]（「驀然回首」）と「私の三人

の恩師」[21]（「我的三位老師」）を読むと分かる。この 2 篇のエッセー(特に「顧みて」)には三毛がどういうきっかけで顧福生のもとで絵を習い始めたか、そして顧福生がどういう態度で三毛と接し、三毛を啓発したか、三毛がどのようにして少しずつ自閉状態から抜けつつあったか、などについて詳細に書かれている。また更にこの 2 篇のエッセーには、三毛にとっての顧福生の存在意義も述べられている。それについて原文を引用してみる。

i「那個擦亮了我的眼睛，打開了我的道路，在我已經自願淹沒的少年時代拉了一把的恩師，今生今世原已不盼見面，只因在他的面前，一切有形的都無法回報，我也失去了語言。[22]」

（「あの私の目を開き、私の道を切り拓いて、すでに自ら埋没することを願っていた少女時代の私をぐいと引っぱってくれた恩師に、この世で再会することはもともと望んでいなかった。彼の前では、一切の形あるものでは恩返しすることができず、私は言葉も失ってしまうから。」）

ii「顧福生老師到底教給了我什麼，以前講過了，可是講也講不出來。只知道今生如果沒有他，今日不會如此壯壯烈烈的活著。[23]」

（「顧福生先生が結局何を私に教えてくれたかについては、以前に語ったことがある。でも語ろうとしても語り出せないこともある。この生涯に彼がいなければ、今の熱烈に生きている私もいないということだけは分かっていた。」）

顧福生に絵を教わる前もその後も、三毛は何人かの先生[24]のもとで絵を習っていた。しかし、三毛が指導法や影響力の点で高く評価したのは顧福生のみである。なぜ三毛にとって顧福生の存在がそれほど大きかったのかというと、一つは顧福生が先生として良い教育方法を実施していたからでもあるが、それだけの理由ではない。やはり特別な理由があるに違いない。筆者は三毛が顧福生に対して先生への尊敬と崇拝という感情だけではなく、思春期に入ったばかりの少女が年上の男性に抱きがちな好意や憧れの感情、更には恋愛感情も抱いていたと推察する。しかしながら単なる好意や憧れからでは三毛は顧福生からあれほど影響を受けたとは考えにくい。三毛は顧福生に恋愛感情を抱いていたのではあるまいか。

この点について、三毛の恋愛を論じている『三毛情史』[25]を含む先行研究では触れられていない。そこで、モダニズムの影響が見られる初期の最初の 4 篇――「惑」、「秋の恋」、「月河」、「極楽鳥」を通して、三毛の顧福生に対する恋愛感情の存在を明らかにする。

まず、この 4 篇の小説の主人公は、「秋の恋」の男主人公の「彼」（船員）を除いて、皆絵画と関係のある人物である。

「惑」の「私」は絵を習っている生徒である。「秋の恋」の「彼女」はフラン

スで絵を習いながら、絵を売っている人であり、「月河」の林珊と沈は同じ絵画の趣味を持っているため共鳴し合うようになった2人である。そして「極楽鳥」の「S」と「私」は絵の先生と生徒であり、それは正しく顧福生と三毛との間柄である。

つぎに、「惑」以外の3篇の小説には顧福生に関わる外国が登場する。

「秋の恋」の舞台はパリである。「秋の恋」が発表されたのは1963年1月で、その時顧福生はちょうどパリにいた。同年6月に発表された小説「月河」の男主人公沈が渡った国はアメリカである[26]。顧福生は1961年の末にパリへ渡って約1年半滞在し、その後アメリカへ移る。従って顧福生がアメリカへ移ったのはちょうど1963年の半ば頃ということになる。さらに1966年に発表された「極楽鳥」では、「私」が恋する「S」はアメリカのニューヨークにいる。顧福生は1963年半ば頃にニューヨークへ渡り11年ほど住んでいた。従って1966年の時点では顧福生はニューヨークにいた筈である。このように作者がこれら3篇の小説で顧福生が当時住んでいた国を登場させたのは、ただの偶然とは考えかねる。やはり三毛が顧福生に恋愛感情を抱きながらこれらの小説を書き上げたと判断するのが妥当だと考える。

また、小説中の特定の場面から三毛の顧福生への愛情の存在を見て取ることができる。

次の二つの場面を比較してみよう。

①：小説「極楽鳥」中の場面

「後來你[S——筆者]說，“來看，給你看樣新東西。”我們跑到隔壁一間。你給我看那張大畫，新畫的，你鋪在地上給我看。[27]」

（「その後、あなた[S——筆者]は言った。“来て、新しいものを見せてあげよう。”私たちは隣の部屋に行った。あなたはあの大きくて新しい絵を見せてくれた。あなたはそれを床に広げて見せてくれた。」）

②：エッセー「顧みて」中の場面

「“今天不要畫， 來，給你看我的油畫，來，跟我到另一間去，幫我來抬畫——”老師[顧福生——筆者]自然的領我走出去，他沒有叫我停課。[28]」

（「“今日は絵を描かないことにしよう。おいで、私の絵を見せてあげる。おいで、一緒に他の部屋に行こう。絵を運ぶのを手伝って。”先生[顧福生——筆者]は自然に私を連れて出た。彼は私に授業をやめさせなかった。」）

場面①と場面②はどちらも「私」が先生に別の部屋に連れて行かれて先生が描いた大きい絵を見ることを書いている。

更に次の三つの場面を比較してみよう。

③：小説「極楽鳥」中の場面

「你送我到門口。天暗了，你穿著那件深紅的毛衣，站在大大的闊葉樹下。我走到巷口，回頭望你，你仍然站在那兒，紅毛衣里滲進了黃昏的灰色。[29]」

（「あなたは入り口まで送ってくれた。暗くなり、あなたはあの臙脂色のセーターを着て、大きな広葉樹の下に立っていた。私が路地の入り口であなたを振り返って見ると、あなたはまだそこに立っており、臙脂色のセーターに夕暮れの灰色が染み込んでいた。」）

④：エッセー「顧みて」中の場面

「那時已是黃昏了，老師[顧福生――筆者]在闊葉樹下送我，走到巷口再回頭，那件大紅的毛衣不在了。[30]」

（「その時すでに夕暮れになっていた。先生[顧福生――筆者]は広葉樹の下で私を見送った。路地の入り口まで歩いて振り返って見ると、あのスカーレットのセーターを着た人は姿を消していた。」）

⑤：エッセー「私の三人の恩師」中の場面

「恩師顧福生那麼鮮明的一件正紅 V 領毛線衣，就在台北泰安街那條巷子的陰天黃昏里明亮亮的成為一種寂寂的永恆。[31]」

（「恩師顧福生が真っ赤な“V”字形の襟のセーターを着て、台北の泰安路のあの夕暮れの曇り空に覆われた路地に佇んでいる場面は、私の中で永久に消えない明るいが物寂しい景色になった。」）

場面③、④、⑤のいずれの時間帯も夕方であり、いずれの場所も路地であり、先生が着た服も全て赤色のセーターである。さらに場面③と場面④は、先生が広葉樹の下で「私」を見送る、という共通点もある。

このように場面①と場面②及び場面③と場面④と場面⑤はそれぞれ全く同じではないが、よく似ているのである。つまり、エッセー「顧みて」、「私の三人の恩師」に描かれた顧福生の行動や台詞は、小説「極楽鳥」において「S」の行動や台詞として描かれている、ということになる。またすでに述べたように、小説「極楽鳥」の主人公「私」と「S」の生徒と先生という関係は現実の三毛と顧福生との関係と一致するし、「S」が台湾から外国へ渡ったというストーリーも顧福生が台湾からパリ、さらにアメリカに渡った事実と同じである。このように「S」と顧福生とはよく似ており、「S」の人物像に現実の顧福生の姿が反映されていると言える[32]。従って、小説「極楽鳥」の中の生徒「私」が先生である「S」に持っている片思いの恋愛感情は、現実の中の生徒である三毛がその先生

「顧福生」に持っていた片思いの恋愛感情を反映していると言ってよいだろう。
以上に述べたように、当時の三毛はモダニズムを標榜する顧福生先生に対して単純な尊敬や感謝の気持ちだけではなく、思春期の少女の憧れの男性に対する恋愛感情も持っていた。そう考えると、なぜ三毛が顧福生をあれほど高く評価しているのかは理解しやすくなるし、三毛が顧福生からモダニズムの影響を受けたことも当然なことだと思われる。

4．モダニズムを宣伝した雑誌とモダニスト(顧福生以外)との接触

三毛がモダニズムの影響を受けた経路はもう一つある。それはモダニズムを提唱する雑誌や人物(顧福生以外)などとの接触である。まず当時三毛が読んだ雑誌『現代文学』と『筆匯』を見てみよう。

『現代文学』は1960年に創刊されてからまもなく台湾文壇でモダニズムを宣伝する中心的な雑誌となる。『筆匯』は1959年に創刊され、主編者は尉天驄である。尉天驄は江蘇省徐州市の出身で、1949年に台湾へ移る。大学時代に現代詩人紀弦(注8参照)の授業を受けたことを契機に、モダニズムに興味を持つようになる。『筆匯』は創刊後モダニズムを宣伝していた。

三毛はエッセー「顧みて」で、顧福生から『現代文学』や『筆匯』などの雑誌を借りて読んだと書いている[33]。当時の顧福生の芸術主張や『現代文学』の主編者白先勇との関係からすれば、顧福生の家に二誌があるのは全く不思議なことではない。二誌を読んだことは三毛がモダニズムの影響を受けた経路の一つだと考えられる。

次に当時三毛が接した顧福生以外のモダニズムの作家、画家について見てみよう。

白先勇、1937年桂林に生まれる。父親は国民党の有名な将軍白崇禧である。1948年台湾に渡り、1957年台湾大学外国語学科に入学した。1960年同大学の同級生たちと『現代文学』を創刊し、編集長となる。西洋の現代主義文学を翻訳、紹介しながら、文学創作を実践した。1963年にアメリカへ渡る。初期小説作品は「月夢」、「金大奶奶」など。

三毛は作品「夢の如く三十年」[34]（「驚夢三十年」）で白先勇の出来事を追憶する。このエッセーによれば小さい頃三毛の家と白先勇の家とは非常に近く、三毛は小学校一年生の時すでに白先勇のことを知っていた。当時、三毛は自閉状態にあったため、白先勇との直接の接触はほとんどなかったが、白先勇の作品は読んでいた。

陳若曦、1938年台湾に生まれる。女流作家。1957年台湾大学外国語学科に入学してから、『文学雑誌』に小説を掲載し始める。1960年同級生の白先勇、王文興などと共に『現代文学』を創刊し、編集者になる。初期作品に「我的弟弟康雄」、「将軍族」などがある。

三毛が陳若曦と出会ったのは顧福生の紹介によるものだとされている。

「顧福生還有意介紹三毛去結識文藝界人士。拿著顧老師的紙條，她敲開了女作家陳若曦的家門，常常去做客，與她成了好朋友。[35]」

（「顧福生はまたわざわざ三毛に文壇人士を紹介してあげた。顧先生の紹介状を持って、三毛は女性作家陳若曦の家を訪ねた。その後、よく遊びに行き、友人になった。」）

陳若曦と友人になった三毛は、1964 年、陳氏の勧めで中国文化大学に進学した。

韓湘寧、1939 年重慶に生まれる。1960 年か 1961 年に台湾師範大学芸術短期大学を卒業。同年「五月画会」に入会。初期作品の作風は抽象主義である。1967 年にアメリカへ移住する。顧福生に続いて三毛の絵の先生となる。

彭萬墀、「五月画会」のメンバーであり、モダニズム美術を唱える。韓湘寧に続いて三毛に絵画を教える。

上に挙げた作家白先勇と陳若曦、画家韓湘寧と彭萬墀は皆当時有名なモダニストであり、三毛と関わりの深い人物でもある。三毛は彼らと接触しているうちに、彼らからもモダニズムの影響を受けたものと考えられる。

以上、1960 年前後の三毛の心を病んだ状態、三毛が尊敬し、恋愛感情を持っていた、モダニズムを主張する若手画家――顧福生の影響、モダニズムを提唱していた他の若手芸術家や雑誌などとの接触、という三つの面から少女時代の三毛がモダニズムの影響を受けた背景を検討した。

1964 年、三毛は聴講生として中国文化大学に入る。その時三毛はすでに文学作品を 3 篇発表していたが、文学学科を選ばずに、哲学学科に入った。それは恐らくモダニズム思想の影響で人間の内なる世界を理論的に探求しようとしたからであろう。

注

[1] 1943 年生まれという説もある。

[2] 中国では 1937 年～1945 年に日中戦争が、1945 年～1949 年に中国共産党と中国国民党による国内戦争が起きている。

[3] 陳嗣慶「我家老二――三小姐」（三毛著『鬧學記』［台灣皇冠出版社。1988 年初版］）による。原文は「“平” 是因爲在她出生那年烽火連天，作爲父親的我期望這個世界再也沒有戰爭，而給了這個孩子 “和平” 的大使命。」

[4] 伯父陳漢清一家も同行。台湾に移住した後、陳漢清と陳嗣慶は弁護士事務所を共同で経営し、両家族も数年間に亙って同棲していた。

[5] 1962 年～1967 年の間に発表された作品 7 篇のことをいう。

篇名	日本語訳名	初出誌紙	初出年月(日)
惑	惑	『現代文学』	1962 年 12 月
秋恋	秋の恋	『中央日報』	1963 年 1 月 10 日
月河	月河	『皇冠』	1963 年 8 月
極楽鳥	極楽鳥	『徴信新聞報』	1966 年 1 月
雨季不再来	雨季は二度と来ない	『出版月刊』	1966 年 9 月
一個星期一的早晨	ある月曜日の朝	『出版月刊』	1967 年 3 月
安東尼・我的安東尼	アントニー・私のアントニー	『幼獅文芸』	1967 年 6 月

なお、この 7 篇の作品が発表された時、作者は本名陳平を使った。

[6] 本注 5 の一覧表に挙げた最初の 4 篇「惑」、「秋の恋」、「月河」、「極楽鳥」。

[7] 楊匡漢著『中国文化中的台湾』(長江文藝出版社。2002 年)。

[8] 紀弦は 1913 年中国河北省に生まれる。1930 年代に文学創作を始めた。1948 年に台湾に渡り、『平和日報』の編集者を勤める。1953 年に雑誌『現代詩』を創刊し、1956 年に「現代派」の成立を宣言した。1976 年にアメリカへ移住。著作に『行過的生命』、『摘星的少年』などがある。

[9] 夏済安は 1916 年蘇州に生まれる。1950 年台湾に移住。1956 年『文学雑誌』を創刊する。1965 年に脳出血によりアメリカで死去。著作に『黒暗的閘門』などがある。

[10] 欧陽子は本名を洪智恵と言い、原籍は台湾南投県である。1939 年に日本の広島市で生まれた。日中戦争後に台湾に戻る。1960 年に同級生の白先勇、王文興などと共に『現代文学』を創刊した。1962 年アメリカに移住。著作に『秋葉』、『移植的桜花』などがある。

[11] 王文興は 1939 年福州市に生まれる。後台湾に移住した。1960 年に同級生の白先勇、欧陽子などと『現代文学』を創刊した。著作に『家変』、『背海的人』などがある。

[12] 安興本著『衝突的台湾』(華文出版社。2001 年)。

[13] 陳愛璞、張瑞德著『三毛傳奇』(広東人民出版社。2000 年)。

[14] 三毛「蕧然回首」(『送爾一匹馬』[廣東旅遊出版社。1996 年。台灣皇冠出版社 1983 年初版本は未見])。

[15] 本注 13 参照。

[16]「存在困境存的超越——試論顧福生的藝術」(『藝術家』1996 年 3 月号)。

[17] 本注 16 参照。原文は「探索生命意義的存在主義思想亦成為其畢生藝術的中心思想。」

[18] 本注 16 参照。

[19] 白先勇「殉情藝術的人」(1995 年 6 月 2 日『中國時報』)。

[20] 本注 14 参照。

[21] 三毛著『我的快樂的天堂』(台灣皇冠出版社。1993 年初版)。

[22] 本注 14 参照。

[23]「我的三位老師」(『我的快樂的天堂』[廣東旅遊出版社。1996 年。台灣皇冠出版社 1993 年初版本は未見])。

[24] 顧福生に出会う前、三毛は黄君璧から中国画を教わり、ついで邵幼軒について中国画を学んだ。顧福生が出国した後は、先ず韓湘寧について洋画を習い、ついで韓氏から紹介された彭萬墀について洋画を学んだ。

[25] 陳琳著。時代文藝出版社。1997 年。

[26] 小説の原文は「我明早九點鍾的飛機飛美國，去加拿大研究院」(「僕は明日朝九時の飛行機でアメリカに飛び、カナダ研究院に行きます」)。ここの「加拿大研究院」は「カナダの研究院」ともとれなくないが、文脈から「[アメリカにある]カナダ研究院」と考えた。この「カナダ研究院」が現在のどの学校(大学)に当たるのかは不明。
[27] 三毛著『雨季不再來』(皇冠文化出版有限公司。1991 年。1976 年初版本は未見)。
[28] 本注 14 参照。
[29] 本注 27 参照。
[30] 本注 14 参照。
[31] 本注 23 参照。
[32] 小説では「S」が次のように登場する。「S(請念做 Sim)，何必寫那些盼望我如何如何的話」(「S(どうぞ Sim と読んでください)、どうして私にああして欲しいこうして欲しいと期待するようなことを書くのですか」)。「Sim」という言い方が用いられるのはここのみであり、他は皆「S」となっている。作者が「S」(「Sim」)という名前に託した意味は今の段階では不明だが、あるいは顧福生のことと関わっているかもしれない。
[33] 原文は「他[顧福生――筆者]自動遞過來幾本『筆匯』合訂本，還有幾本『現代文學』雑誌。」(「彼[顧福生――筆者]は自ら『筆匯』の合本を数冊と雑誌『現代文学』を数冊渡してくれた。」)
[34] 三毛著『送爾一匹馬』。
[35] 本注 13 参照。

参考文献(すでに本文と注に掲げたものは除く)

山口守編、藤井省三(他)著『講座台湾文学』(国書刊行会。2003 年)。
呂正惠、趙遐秋編『台湾新文学思潮史綱』(崑崙出版社。2002 年)。
白先勇著『白先勇文集 第四巻 第六只手指』(広州花城出版社。2000 年)。
下村作次郎著『文学で読む台湾』(田畑書店。1994 年)。
古継堂著『台湾小説発展史』(春風文芸出版社、遼寧教育出版社。1989 年)。

(信州大学 全学教育機構 非常勤講師)
2007 年 4 月 6 日 採録決定

(要 约)

臺灣女性作家三毛研究

——淺談其所受現代主義思想影響的背景——

李 丹 丹

臺灣女性作家三毛，本名陳平，1945 年(一說 1943 年)生於四川省重慶市。1948 年隨父母遷入臺灣。自幼喜愛讀書。1962 年與雜誌《現代文學》發表處女作小說《惑》。此後至 1967 年三毛以本名發表作品 7 篇。1962 年至 1967 年爲三毛的創作初期。三毛創作初期的前 4 篇作品《惑》、《秋戀》(1963 年)、《月河》(1963 年)、《極樂鳥》(1964 年)中，可以看到現代主義思想的影響。本文試對當時三毛所受現代主義影響的背景做以分析和闡述。

本文首先對 20 世紀 60 年代前後盛行於臺灣文壇的現代主義做了介紹。

臺灣現代主義文學興起於 50 年代。1956 年詩人紀弦宣佈成立“現代派”。同年文學批評家夏濟安創辦《文學雜誌》。該雜誌強調文學的自由精神及對西方文藝理論借鑑的必要性。1960 年臺灣大學學生白先勇等人創立《現代文學》雜誌，宣傳介紹西方的現代主義文學。現代主義在文學在在臺灣的盛行持續到 70 年代初期。三毛的初期作品便是在這種大環境中誕生的。

其次本文分析了 1960 年前後三毛的精神狀態於現代主義思想的關係。

1957 年由於數學老師的一場體罰，致使三毛在精神上陷入自閉狀態，此後 7 年她一直休學在家。筆者認爲，封閉在自我世界中，內心異常寂寞的三毛，應該是比較容易接受提倡非理性與自我表現的現代主義思想的。

第三，本文具體闡述了 1960 年左右三毛對其繪畫教師顧福生所持有的感情。指出當時三毛對顧福生所持有的不僅是尊重與感謝之情，更有情竇初開的少女對異性的愛戀之意。而她所暗戀的年輕畫家正是當時大力提倡現代主義思想的一員。因此，少女三毛受此人影響而接受現代主義思想的可能性極大。

最後，本文介紹了 1960 年前後三毛所接觸的提倡現代主義的畫家(顧福生以外)、作家及雜誌。從當時接觸的人物和書籍的角度論述了她當時接受現代主義思想的可能性。在顧福生之後，三毛曾先後跟隨韓湘寧及彭萬墀學畫，而這兩位年輕畫家也是提倡和宣傳現代主義的「五月畫會」的重要成員。三毛的友人作家陳若曦及近鄰作家白先勇是當時重要的現代主義流派的作家。另外三毛當時在恩師顧福生處借閱的雜誌『筆匯』、『現代文學』也是介紹和宣傳現代主義的重地。